

## 富山県五箇山地域における和紙産業の変遷と文化的景観

The Transition of Washi Industry and Cultural Landscape Conservation in Gokayama, Toyama, Japan

王 聞\* 深町 加津枝\*\* 柴田 昌三\*\*

Wen WANG Katsue FUKAMACHI Shozo SHIBATA

**Abstract:** Gokayama Washi paper, traditional handmade paper, has a long success story spanning about 600 years in Gokayama, where world heritage historic villages are located. Washi's raw materials are sourced and harvested from plants which are found in forests and cultivated in fields. As a local industry, Washi production relates to natural resource utilization and local residents' livelihoods, as well as influencing the cultural landscape. This research aims to clarify the characteristics of cultural landscape as it relates to Washi industry' transition and the status of Washi production, to discuss the efforts toward regional landscape conservation. Through mapwork and conducting a field survey, we found that land use dramatically changed since the late Meiji Era. This included fields of paper mulberry, the raw material for Washi production. These declined sharply in the middle Showa Era, yet we could still find preserved areas of traditional land use and spatial structure representative of the Meiji Era. The status of production changed from household production to community-based unions. With the revitalization of this industry, we found that there was a noticeable tendency for the output of Washi paper to increase. Part of the traditional cultivation and production process is preserved, which are important factors for cultural landscape conservation.

**Keywords:** Gokayama area, Japanese paper industry, cultural landscape, land-use, traditional craft

**キーワード:** 五箇山地域, 和紙産業, 文化的景観, 土地利用, 伝統工芸

## 1. はじめに

文化的景観は「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの」と文化財保護法で定義されている<sup>1)</sup>。つまり、文化的景観は生業・生活を通じて変動する社会情勢に左右される地域社会の営みと自然との相互作用によって作り出された景観である<sup>2)</sup>。「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」によると伝統的工芸品の指定要件は日常性、手工業性、長い歴史性以外に地域性も一つの条件である<sup>3)</sup>。地域それぞれの固有の文化的景観の形成過程には、その地域の生業の歴史の変遷や伝統的な自然資源の利用、技術などが大きく関わっている<sup>4)</sup>。そのため、伝統工芸により形成される文化的景観は、その地域性を表す重要な概念と言える。伝統工芸品の産地における産業景観も一つの文化的景観となる<sup>5)</sup>。古来の技法を受け継いできた日本の和紙産業は、現在まで続く伝統工芸の一つである。和紙は日本の自然や風土の中で生産され、手工業性や歴史性、地域性を持っており、地域社会において重要な役割を果たす。原料となる植物を森林から採取し、畑で栽培する和紙産業は、地域の風土に基づいた生業として、文化的景観の形成に重要な役割を果たしている<sup>6)</sup>。

江戸期の五箇山地域では、村人の生業は雑穀栽培と養蚕業、塩硝製造であり、冬は紙漉きを行っており、農民の年貢は養蚕及び塩硝代金よっての夏成と楮（五箇山和紙の主な原材料）代・紙代よっての冬成の二回で納入していた<sup>7)</sup>。楮及び和紙の生産は年貢納入に当って重要な生業の一つであり、豪雪地帯ならではの雪晒し技法を用いた和紙製造が行われてきた。しかしながら、社会状況が変化の中で塩硝製造は江戸期以降には行われなくなり、養蚕業は昭和後期までに消失した。今日、雑穀は一部の住民の自家あるいは体験農業の一環として栽培されるものの、生業として行われる状況ではなくなった。このように江戸期からの生業が大きく変化の中で、五箇山和紙の生産は今日に引き継がれ、世界遺産となる五箇山地域固有の文化として重要な役割を果たしてい

る。和紙産業は、五箇山地域の自然環境を活かした伝統生業であり、歴史的資産である合掌造りの民家とともに、地域の特性を活かした文化資産としての活用が期待されている<sup>8)</sup>。

一方、日本では社会構造の変容により、人口減少、高齢化の問題が重要な課題となってきている。明治時代以降、機械による生産工程の発達、和紙需要の縮小、国産原料価格の低迷、獣害の増加などの問題<sup>9)</sup>により、楮を主体とした和紙原料栽培が衰退し、手漉き和紙生産量は急激に減少した<sup>10)</sup>。その結果、現在では、和紙とともに歩んできた地域文化の継承・発展が困難になり、和紙生産による景観は喪失の危機に至っている。

日本国内の和紙産業に関する既存研究は、土佐和紙の里の変遷における和紙原料生産の現状の解明<sup>11)</sup>、高知県いの町柳野地区での和紙原料生産の問題点に関する調査<sup>9)</sup>、和紙原料の日本国内での生産の苦境及び海外からの調達状況に関する研究<sup>10)</sup>、及び和紙生産者や和紙漉き村住民の意識調査に基づいたまちづくりの考察<sup>12)</sup>などが挙げられる。これらの研究は和紙原料の生産や流通状況とその変容などに関するものが多数を占めており、意識調査による地域振興に向けた研究もなされてきたが、景観の視点から和紙産業の重要性が認識された研究や、伝統景観の継承の面に焦点をあてた研究は未だにない。一方、五箇山地域に関わる既存研究は、相倉・菅沼世界遺産集落と周辺の集落の空間構造の解析についての研究<sup>13)</sup>、明治以降の相倉集落での土地利用の変遷と農地保全手法<sup>14)</sup>、相倉集落の茅葺き屋根を維持する工程と資源利用などの解明<sup>15)</sup>、及び五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究<sup>16)</sup>など、様々な課題について研究が挙げられる。だがこれらの研究は、世界文化遺産である相倉・菅沼集落を中心として行われたものが多く、また五箇山地域における農村計画学や建築学、地理学、民俗学などの分野で行われた研究が多く蓄積されている。一方、今日に引き継がれる五箇山地域の伝統産業に着目し、地域社会や人の暮らしと文化的景観と関連付けながら、それらの変遷を明らかにした研究は未だにない。

\*京都大学大学院農学研究科

\*\*京都大学大学院地球環境学堂

本研究は、①五箇山地域の和紙産業を対象に、産業に関わる文化的景観の特徴とその明治後期以降の変遷を明らかにする。②和紙の原材料の栽培とその加工工程及び工程の変容を明らかにし、和紙の生産状況を把握する。また③五箇山和紙産業及びその文化的景観を継承する取り組みなどを把握することを目的とした。

## 2. 研究方法

### (1) 調査対象及び対象地

本研究の対象地である五箇山地域は富山県南砺市の「旧平村・旧上平村」(以下「平村・上平村」に略す)とした<sup>17)</sup>。研究対象は五箇山地域で生産されてきた五箇山和紙である。五箇山和紙は加賀藩で使用する紙を供給するために盛んに生産され<sup>18)</sup>、今日に受け継がれている。国の伝統的工芸品に指定された越中和紙は五箇山和紙、八尾和紙、蛭谷和紙を総称したものである。また越中地方は全国的にも最も若い後継者がいる産地である<sup>19)</sup>。

### (2) 時代変遷の分析において年代の設定

本研究では明治後期から平成 30 年までの地形図を用いた土地利用の変化の把握を踏まえ、昭和中期と平成 30 年の和紙産業及び文化的景観の比較を中心に分析した。その理由は、①昭和中期頃、土地利用に激しい変化が起きた；②生産者構成を見ると昭和中期以後からは個人運営の紙漉き屋は姿を消した；③聞き取り調査実施可能な最高齢対象者が語れる最古の時代が昭和中期(当時 20 代)であったことが挙げられる。また、昭和中期以前の和紙産業に関わる典型的な土地利用及び生産形態を示すため、明治後期から昭和初期の変容についても文献調査と地図解析を行った。

### (3) 土地利用と産業規模の変遷

文化的景観の変遷を把握するために本研究では五箇山地域の和紙産業に関わる土地利用と産業規模の変遷を中心に調査を行った。異なる規模での土地利用と産業規模の変遷を把握するために地域レベルと集落レベル、家屋レベルで分析を行った。明治期と昭和期では楮は桑畑の中に混生していた<sup>14)</sup>。和紙産業と養蚕業、二つの別々の産業で必要とされる原材料が同じ土地で同じ年間作業カレンダーによる栽培管理が行われた事から五箇山地域独特の土地利用形態が形成された。しかしながら歴史を辿れば、原材料の共同栽培以外、二つの産業は異なる発展の変遷及び生産形態、生産額の変化が見られた<sup>7)20)</sup>。

#### 1) 地域レベル

地域レベルでは五箇山地域の①明治後期から現在までの楮(和紙の原材料)を栽培する畑の分布とその面積及び②江戸期と現在の和紙産業をしていた集落の数と分布を把握した。

明治期と昭和期の利用状況は明治 42 年、昭和 5 年、28 年、44 年測量地形図からの読取で当時の状況を判断し、聞き取り調査によって検証した。現状は平成 27 年の地形図をもとに現地踏査で得た情報を加え、平成 30 年の土地利用状況を把握した。その後 Auto CAD と Adobe Photoshop を用いて分布図を作成し、その変遷について分析を行った。なお、聞き取り調査により把握された明治期と昭和期には楮は桑畑の中に混生し<sup>8)</sup>、楮畑は面積の約半分を占めていたことを踏まえ、昭和 28 年の地形図に表示されている「桑畑」の凡例をもとに楮・桑畑合計の面積が 372.6ha であることを算出した。そして平村村勢一覧表に同年の平村桑畑面積は 184.0ha と記載され、楮畑の面積 188.6ha であると確認できたため、各地形図に示されている「桑畑」の面積の半分を当時の楮畑面積であるとみなした。

産業規模の変遷は統計資料<sup>7)</sup>より、江戸期に五箇山地域和紙産業を持っていた集落の数を明らかにし、平成 30 年に関しては現地踏査で和紙づくりを行っている紙漉き集落の総数を確認した。

#### 2) 集落レベル

集落レベルでは代表的な集落である平村の籠渡集落を対象にし、

昭和中期と平成 30 年の土地利用の比較を通してその変遷を把握した。また、その集落内の紙漉き屋の総数と分布の変化を把握することで産業規模の変容の把握を試みた。

昭和 28 年と平成 27 年測図の地形図に基づき集落の土地利用を把握した。平成 30 年の籠渡集落の航空写真と現地踏査で得た結果を参照し、平成 27 年の土地利用分布をもとに修正を行い平成 30 年の籠渡集落の土地利用分布状況を把握した。また、籠渡集落誌<sup>20)</sup>に記載されている昭和初年の家屋地図、昭和 59 年及び平成 27 年の住宅地図をもとに聞き取り調査を行い、昭和中期から平成 30 年にかけての籠渡集落の紙漉き屋の変容を確認した。

#### 3) 家屋レベル

家屋レベルでは対象を昭和中期の籠渡集落の家屋と現代の紙生産家屋とし、家屋周囲での土地利用と空間構造について解析比較しどのような変遷があったのかを把握した。地域住民に聞き取り調査を行い、家屋の様式・和紙生産の場所・楮畑の分布についての情報を集計し、データを図面化して昭和中期の典型的な家屋の土地利用パターンを再現した。また、五箇山地域唯一の家族運営の和紙生産組合の家屋での現地踏査と平成 30 年の航空写真をもとに現在の土地利用状況を把握した。

#### (4) 文献調査・現地踏査及び聞き取り調査

和紙生産の規模とその変容を把握するため、資料が存在する平村の村勢調査の生産者構成(明治 37 年～平成 30 年)と生産額(明治 37 年～平成 14 年)<sup>20)</sup>について解析した。平成 30 年の五箇山和紙生産拠点での現地踏査や聞き取り調査を実施し、和紙生産の工程とその変容及び和紙産業に関する文化的景観の継承に向けた取組について把握した。現地踏査及び聞き取り調査は平成 29 年 8 月・9 月、平成 30 年 3 月・6 月・8 月・10 月に総計 6 回実施した。調査対象者は現在和紙産業を営んでいる三組合の従業者 5 名、籠渡集落地域住民 3 名、相倉集落地域住民 1 名、和紙交流活動に関わる大学の教員 1 名の総計 10 名である。

## 3. 和紙産業に関わる文化的景観の特徴とその変遷に関する結果

### (1) 地域レベル

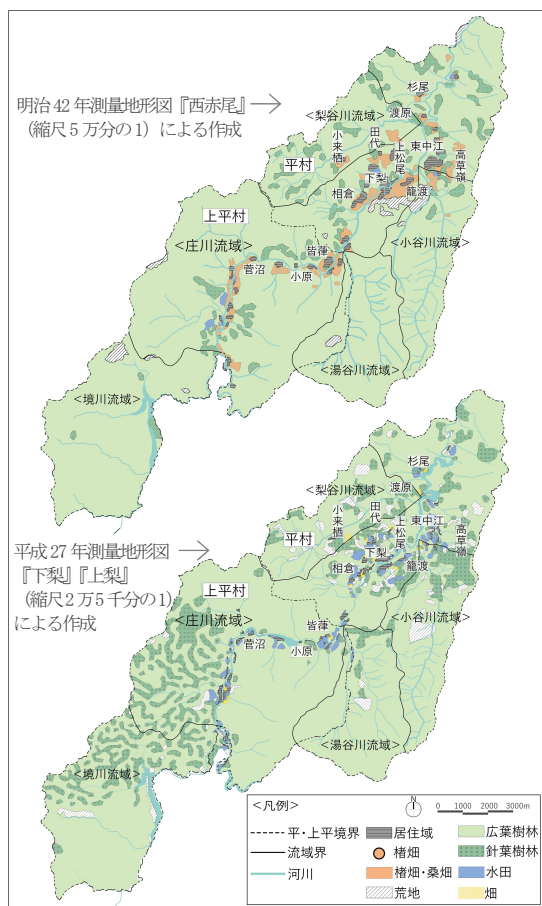
#### 1) 土地利用と空間構造の変遷

明治 42 年の五箇山地域の土地利用を解析した結果(図-1)、明治期には楮畑と桑畑は集落内の居住域を中心とし、その周辺の川沿いの傾斜地に多く分布していた。集落周辺には水田と荒地が存在している。地域内には針葉樹林も見られるが広葉樹林が占める面積の方が広い。平成 27 年の五箇山地域の土地利用をみると(図-2)楮畑と桑畑の面積が大幅に減少し、居住域周辺に分布していた楮畑と桑畑の大半は水田や荒地、畑になった。集落周辺と山間部の針葉樹林面積と広葉樹林域内の荒地の面積は増加した。南側に位置する上平村の広葉樹林の大半は針広混交林となった。

明治 42 年に推定された楮畑の面積は 324.3ha である。この地域の居住域は庄川に近い両岸斜面の平地地又は緩傾斜地にある。楮畑と桑畑は家屋の周りの空き地にあり、畑は居住域内に多く存在するが、居住域から離れた標高がより高い場所にも存在する。昭和 5 年に推定された楮畑の面積は 315.9ha であり、楮畑・桑畑と居住域の分布に大きな変化はなかった。

昭和 28 年に推定された楮畑の面積は 287.9ha であり、その面積は昭和 5 年より 9%ほど減少した。終戦後家庭経済の悪化の改善及び和紙生産の拡大と品質の向上を図るため、紙の統制が解除され、人々が紙作りを再開したことにより当時和紙の生産額が一段と拡大した。和紙生産の拡大に伴う楮皮不足の問題を解決するため五箇山地域では楮の自給を目指して栽培を奨励した<sup>7)</sup>一方、消えた楮畑・桑畑は基本的に樹林地となった。これは昭和 30 年代に本格化した植林活動が影響をおよぼしていると考えられる。

昭和 44 年に推定された楮畑の面積は 22.7ha であり、居住域周



図一 明治42年及び平成30年の五箇山地域の土地利用

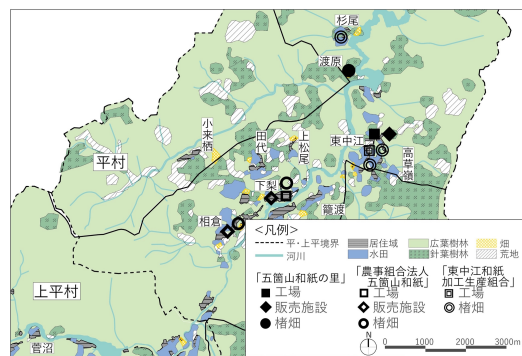
辺の大半の楮畑・桑畑は無くなった。それは昭和30~40年代に米自給を実現するために大規模な開墾が行われ、楮畑と桑畑が水田に姿を変えたことによる。また生活の近代化に伴い和紙の需要が減少し、原材料である楮の需要が減少した事も重要な原因である。

平成30年の楮畑の面積は3.8haである。楮畑は「杉尾」「渡原」「東中江」「高草嶺」「下梨」五つの集落に位置し、和紙産業を営んでいる「五箇山和紙の里」(以下「和紙の里」に略す)、「東中江和紙加工生産組合」(以下「東中江組合」に略す)、「農事組合法人五箇山和紙」(以下「五箇山和紙」に略す)の所有地である。大規模の楮畑も存在するが、小規模の畑が数カ所分布している。楮畑と桑畑の面積は明治42年から全体的に減少し続けている傾向にあるが、各時期の社会背景などが影響し、減少率は異なることが示された。平成30年段階で五箇山和紙を生産している三組合の楮畑、工場、売店の位置を示す分布図を図-2に示す。一部の楮畑は各組合の工場と売店から遠く離れていて、畑作業を行うためには通常車で移動する必要がある。三組合のいずれにおいても工場と売店は基本的に同じ場所に建てられているが、「五箇山和紙」は売店が二箇所であり、その中の一つは工場から離れている。また「五箇山和紙」と「東中江組合」が所有する楮畑の一部は昭和期と同様に家屋と工場の周囲で栽培を行っていることが分かった。

## 2) 産業規模の変遷

江戸期には平村と上平村の合計51集落のうち43集落(集落総数の84%)が和紙産業を営んでいた。和紙産業を営む43集落のうち15集落は元禄時代から紙漉きが続いて来た集落であり、他の集落よりも早い時期から和紙産業が発達した。これらの集落は五箇山地域内の庄川流域の中心部に多く分布し、庄川の上・下流域へと拡散した。享保時代から紙漉きを始めた集落は7集落である。

平成30年段階で五箇山地域では「下梨」と「東中江」二つの集落で和紙産業の姿が見られる。「五箇山和紙」は下梨集落を拠点



図二 平成30年の楮畑、工場、売店の分布

として運営している。「和紙の里」と「東中江組合」は東中江集落に位置している。現在まで引き継がれてきた集落は江戸期の元禄から和紙が発達した地帯に位置している。和紙産業が栄えていた時期と比べると和紙漉き集落の数は急激に減少したことがわかる。

## (2) 集落レベル

### 1) 土地利用と空間構造の変遷

集落レベルでの土地利用と空間構造の変遷は、五箇山地域での和紙産業の中心地の1つであった籠渡集落を事例にして明らかにした。天明4年の五箇山地域の楮皮出来高の統計をみると、67村の楮皮平均生産高は約25束であったが、籠渡集落の生産高は62束3貫であった<sup>7)</sup>。籠渡集落は庄川沿いに位置し、江戸期以前から籠の渡しがあり、明治初期になると橋がかかり、地域の交通要所として和紙の生産と販売を支えてきた<sup>7)</sup>。昭和45年の山村振興事業で籠渡集落に製紙工場が設立されるなど、五箇山地域における昭和後期までの和紙産業の中心地として機能してきた<sup>20)</sup>。

図-3に示す籠渡集落周辺の土地利用をみると、昭和28年頃、楮畑と桑畑は居住域の四方に広がり、楮畑での作業や栽培中の管理、収穫後の運搬などが容易にできた。楮畑・桑畑の北側と庄川本流の間には広葉樹林が存在する。一部の広葉樹林は楮畑・桑畑の南側に位置し、南方向の標高が高い所へと樹林地が広がっていた。また南側には大面積の荒地も存在していた。

平成30年の居住域周辺には多くの水田があり、その外側には荒地が存在している。居住域の南側、標高が居住域より高い所には針葉樹林が分布している。昭和期、この地域は楮畑・桑畑であったものの現在は「雪持林」として防災の機能を果たしている。また、居住域の北側の部分にあった楮畑・桑畑、及び集落の南側の標高最高点は現在すべて針広混交林になっている。

### 2) 産業規模の変遷

地域の紙漉き集落の減少とともに各紙漉き集落中の紙漉き屋数も減少した。昭和30年頃には籠渡集落は伝統的な建築様式である合掌造りが多く建ち並び、その紙漉き屋及び家屋の分布をみると(図-4)、家屋は全部で33軒あり、その中19軒は紙漉き屋で家屋総数の約58%を占めていた。明治期と昭和前期の紙漉き屋の比率はさらに高かったと考えられる。平成30年、籠渡集落の家屋は全部で25軒あるが紙漉き屋は一軒も見当たらない。元々紙漉き屋であった家屋の現状を確認したところ、19軒の紙漉き屋のうち74%にあたる14軒は住宅用建屋として使われている。26%にあたる5軒が無くなっていた。

### (3) 家屋レベル

昭和中期の家屋空間構造を把握する為に籠渡集落の和紙生産経験者の家屋を中心に現地踏査を行い、特徴を把握した上で再現した。平成30年の家屋空間構造を把握する為に三組合を対象として現地踏査を行った結果、「東中江組合」のみ家族運営形態を引き継ぎ、昭和中期に見られた空間構造の特徴を一部ではあるが保っていた。文化的景観として重要な要素が含まれているため、その組合の空間構造を解析した(図-5)。

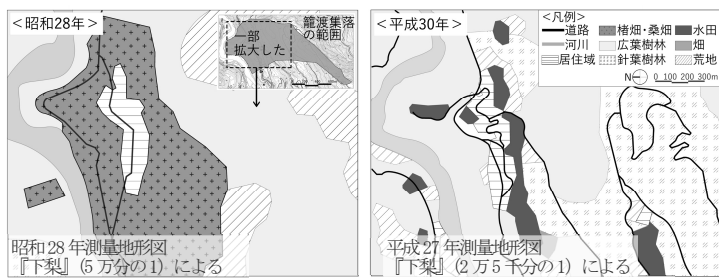


図-3 昭和28年と平成30年の籠渡集落周辺の土地利用

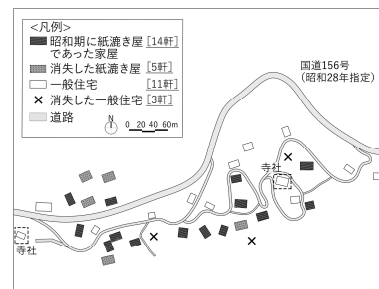


図-4 籠渡集落の紙漉き屋及び家屋分布の変化

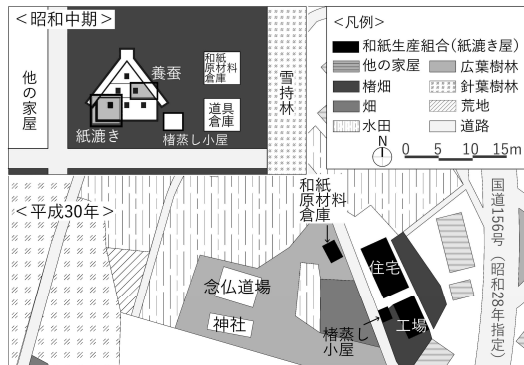


図-5 昭和中期の紙漉き屋の空間構造及び平成30年の和紙生産組合の家屋周辺の空間構造

昭和30年前後の家屋は合掌造りであり、生業と家族の生活は同じ屋根の下で行われていた。合掌造り家屋の一階の片隅に紙漉きの場所を設置し、二階は養蚕の場所として使用されていた。家屋の近くに和紙原材料（楮とトロロアオイ）を保存する為の倉庫があった。今回の調査対象家屋では、建築業や林業、及び桶屋の仕事で使う道具の保管倉庫が和紙原材料保管倉庫の隣にあった。また楮畑・桑畑は家屋周辺の土地のすべてを占めていた。居住域より標高の高い山地には、針葉樹林・広葉樹林などの「雪持林」が分布しており、雪害から家屋を守る防災機能を果たしていた。

平成30年の「東中江組合」の家屋は、東中江集落に属している。周辺の土地利用は昭和期同様、伝統的な様子を保っているが合掌造り家屋は見られなかった。和紙生産の作業工場を住宅用建屋の南東側に新しく建設し、住宅とは分離している。昭和期と同様に作業工場の外側の西隅には楮などの主原材料を蒸す楮蒸し小屋がある。住宅の西側に原材料を貯蔵する倉庫がある。その位置は現在まで変わっていない。住宅、工場と倉庫の周辺には楮畑が分布している。住宅の東側及び工場の南側の楮畑は昭和期から栽培している。また工場西側の楮畑は工場に入る道沿いにあり、楮成長の姿の展示と昔の風景の再現のために植えられた。

#### 4. 和紙生産の工程及びその変容に関する結果

##### (1) 生産者構成と生産高の変容

和紙産業と人とのつながりを明らかにするため、明治後期以降の五箇山地域・平村における和紙産業の生産者構成の変容について解析した(図-6)。明治37年、生産戸数は200戸以上存在し、従業者数は1200人を超えた。大正期以降生産戸数と従業者数は減少し続けた。昭和39年から統計方法が変わり個人運営と組合運営別の生産拠点数が記録されている。昭和39年、組合として運営しているのは「五箇紙協同組合」(「五箇山和紙」の前身)のみであり、他の9戸は個人運営の紙漉き屋であった。昭和42年以降は個人運営の製造所は徐々に減少し、昭和62年に姿を消した。昭和後期からは原料の共同購入と製品の共同販売を行い、古典和紙を復興するため組合の形態だけで生産されるようになった。

現在五箇山地域で和紙作りをしている組合は「和紙の里」、「東中江組合」と「五箇山和紙」の三組合である。昭和25年から生産を行っている「五箇山和紙」には、現在では合計8人の従業者

がいる。昭和43年から組合の形態で運営している「東中江組合」の従業者合計は6人で、昭和57年から運営を始めた「和紙の里」には11人の従業者がいる。和紙作り従業者の合計は25人である。

明治37年から平成14年までの生産額は大きく変化した(図-7)。明治37年から昭和20年の生産額は低く、昭和20年から増加し始め、昭和30年代ごろに一度ピークとなり、昭和40年ごろには生産額が一時的低迷した。その後徐々に生産額は増え続けて昭和55年頃の減少を経て、それ以降は増加傾向に転じた。昭和後半以降の和紙産業の低迷にもかかわらず、生産額は増加し続けている点が注目される。インフレーションなどの経済的な原因や社会的背景による影響もあると考えられるが、それら以外の主な原因は、和紙を用いた工芸品の生産によって和紙製品の価値が認められるようになったことであると考えられる。

##### (2) 原材料の取得方法

五箇山和紙は紙のもととなる楮と紙漉きの際にのりとして入れるトロロアオイが原材料となっている。主な原材料は楮であるため、本研究ではトロロアオイの栽培過程には触れないことにする。

平成30年の楮畑の作業内容と年間カレンダーをみると(表-1)、楮畑での作業は雑木切り、肥料まき、除草剤散布、殺虫、草刈り・草取り、芽掻き、剪定、楮刈取り、楮束ねと楮運搬の10種類である。雑木切りは毎年4月に一回行う。肥料まきは年間に2回行い、一回目は楮の成長が始まる前、二回目は成長期間中に行う。草刈り・草取り、芽かき、剪定は同時に行い年間に2~3回実施する。雑草は楮の成長初期から現れるため草刈り作業は早めに始まる。楮の成長後期になると新芽が出ないため芽かきの作業は草刈り作業と比べて一ヶ月早く終わる。収穫期間は例年11月であり、楮刈取り、楮束ねと楮運搬の三つの作業内容を含んでいる。

三組合における平成30年の楮畑作業に投入した労働量の状況を把握した(表-2)。楮の成長期前は雑木切り、肥料まき、除草剤散布と殺虫剤の準備などの作業が主になるので比較的労働力を必要としない。「五箇山和紙」は除草剤散布を行っていない。成長期中は、草刈り・草取り、芽掻きと剪定の一連の作業があるため、最も多くの労働量が必要な時期である。収穫は従業者全員で行う。年間の畑作業に、「和紙の里」と「東中江組合」は概ね同じ労働量を投入し、「五箇山和紙」はその約半分の労働量を投入している。昭和前期まで楮は自給で栽培を行っていたが、昭和中期から和紙生産の拡大により、原材料の不足が原因でパルプを一部の原材料として購入した。現在では、三組合の一部の楮は地元で調達している。村内の栽培農家が減少したため、他の地域からの購入が増加している傾向にあることがわかった。

##### (3) 和紙生産の加工工程の変化とその現状

平成30年に行われた現地踏査と聞き取り調査では、五箇山の和紙加工工程は①木楮蒸し、②楮皮剥ぎ取り、③楮皮干し、④楮皮たくり、⑤雪晒し、⑥楮皮洗い、⑦楮皮の煮熟、⑧あく抜き、⑨ちり取り、⑩紙たたき、⑪繊維ほぐし、⑫紙漉き、⑬紙圧搾、⑭紙乾燥、⑮紙選別、⑯工芸品製造、⑰販売である。④楮皮たくりは、たくり板の上で水浸しした黒皮の渋皮をけずり取り、白皮を得る工程である。⑤雪晒しは、雪の上に糞を並べ、その上に白皮



を広げて雪で晒すことで、天然の白色が得られるという工程である。この雪晒しは五箇山地域の独特な伝統方法として現在まで伝承されてきた。⑫紙漉きは、鹿角の水に楮繊維とトロロアオイの粘液を混入し、簀笥で作業を行う。この工程は、昭和後期までは女性の仕事であった。⑩紙たたき、⑪繊維ほぐし、⑬紙圧搾と⑭紙乾燥は、昭和後期以前にはすべて手作業で行われていたが昭和50年前後から機械を導入し機械による作業となった。三つの組合は、協同的に今日まで五箇山和紙産業を維持してきたが一部の加工工程の作業状況は異なっている(表-3)。

三組合ともに作業の大半の工程は自らの工場で行っているが①の木楮蒸しの作業に関しては、「東中江組合」が昭和後期に建設した楮蒸し小屋を利用して行っている。②楮皮剥ぎ取りと③楮皮干しは、同時に作業する工程であり、「和紙の里」は他者に作業を委託している。④楮皮たくりは、比較的労力がかかる手作業であるため「和紙の里」と「東中江組合」は隣村の高草嶺集落の農家に作業を委託している。⑤雪晒しは「東中江組合」だけが倉庫の南側に位置する保有畑を用いて、この伝統的手法を伝えている。⑥楮皮洗いから⑮紙選別までの作業場所は、基本的にそれぞれの工場で行われている。しかし、「東中江組合」は⑭紙乾燥の作業を行う際、工場の乾燥板で乾かすのみならず、伝統的な板干しも行っているため乾燥場所は工場外の場合もある。⑯工芸品製造は、「和紙の里」と「五箇山和紙」は自らの体験館で製造をしているが、「東中江組合」は自社での工芸品生産は行っておらず、他社に委託している。⑰販売に関しては、「和紙の里」と「五箇山和紙」は自ら経営する売店で行っている。また三組合の商品は全国の和紙製品ショップでも販売されている。

①木楮蒸し～⑤雪晒しは、首尾一貫した作業プロセスとして毎年11月から翌年の3月の間の期間に行われている。⑥楮皮洗い

～⑰販売の作業は、昭和30年以前は冬だけに行われていたが、現在では常に行なわれている。その頻度は毎日又は週一回ないし三回である。各工程の一回の作業は一人ないし三人の少人数で行い、それぞれに独特な作業風景が見られる。特に②楮皮剥ぎ取りの作業は一人が束の皮の部分を持ち、数本の小口を握って相手の前に差し出すという二人一組の作業風景が見られる。「和紙の里」は多様な和紙工芸品を製造・開発しているため、⑯工芸品製造の作業人数は毎日約5名である。「五箇山和紙」では和紙お面と和紙人形の製造が特徴であり、作業者は二人(全員男性)である。

### 5. 和紙産業に関する文化的景観の継承に向けた取り組みに関する結果

和紙産業に関する文化的景観の継承に向けた取り組みとしては、①地域産業としての振興、②町の観光との結びつきの向上、③教育との連携の三点が挙げられる。

江戸期の五箇山地域の和紙産業は藩営事業であったが明治期になると公的機関に代わり民間組織が出現した。戦後、和紙の需要が減退し、それまでの生産地が次々と消滅するなかにあっても、伝統的な技術を守り江戸期の古典和紙の製造を継承するため、あらゆる分野で新たな枠組みが求められた。五箇山和紙においては、昭和25年に「五箇紙協同組合」、昭和43年に「東中江組合」が結成され、古典和紙の継承及び和紙原材料の共同購入や共同販売などを行った。昭和57年には和紙製造技術近代化の実現、また郷土を代表する地場産業として更なる発展を図るため、若者を主体とした「和紙工芸研究館」(「和紙の里」の前身)が建設された。

五箇山では、観光及び和紙などの地場産業の活力を後押しする景観づくりを策定し多様な景観資源を活用している<sup>9)</sup>。五箇山和紙に関する技法の伝承及び山村と都市との交流を図るため、平成

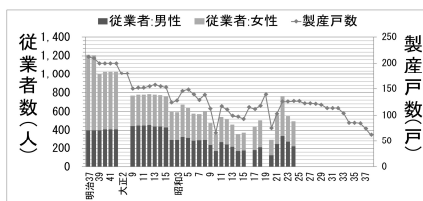


図-6 明治37年～平成30年の平村の生産者構成の変容

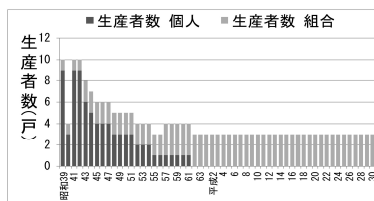


図-7 明治37年～平成14年の平村における和紙産業の生産額の変化<sup>20)</sup>

表-1 平成30年の楮畑の作業内容と年間カレンダー

作業内容	一年間												備考
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
① 雑木切り	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	2回行う
② 肥料まき	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	散布は当年の状況による
③ 除草剤散布	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	散布は当年の状況による
④ 殺虫剤散布	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	2~3回行う
⑤ 草刈り・草取り	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	2~3回行う
⑥ 芽掻き	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	2~3回行う
⑦ 剪定	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	2~3回行う
⑧ 楮刈取り	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
⑨ 楮束ね	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
⑩ 楮運搬	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	

表-2 平成30年の楮畑作業にかかる労働量の現状

作業内容	五箇山和紙の里		東中江和紙加工生産組合		農事組合法人五箇山和紙	
	作業総時間(H)	作業総人数(人)	作業総時間(H)	作業総人数(人)	作業総時間(H)	作業総人数(人)
① 雑木切り	4	1	4	1	4	1
② 肥料まき	48	6	32	4	8	1
③ 除草剤散布	24	3	16	2	-	-
④ 殺虫	16	2	8	1	8	1
⑤ 草刈り・草取り	480	60	576	72	192	24
⑥ 芽掻き	200	25(他社に委託)	272	34	192	24
⑦ 剪定	48	6				
⑧ 楮刈取り	24	3				
⑨ 楮束ね	24	3				
⑩ 楮運搬	844	103	908	114	404	51

表-3 平成30年の三つの組合の加工工程の現状

作業内容	五箇山和紙の里			東中江和紙加工生産組合			農事組合法人五箇山和紙		
	場所	作業期間	作業人数(1回)	場所	作業期間	作業人数(1回)	場所	作業期間	作業人数(1回)
① 木楮蒸し	工場	11月～3月(週2回)	1	楮蒸し小屋	11月後半から2週間	6	工場	11月～3月(週2回)	1
② 楮皮剥ぎ取り	他人に委託	12月/1月～4月	2	工場	11月後半から3週間	3~4	工場	1月～2月	4
③ 楮皮干し	他人に委託	1月～2月	1	他人に委託	12月～2月	2	工場	1月～2月	1~2
④ 楮皮たくり	他人に委託	x	x	工場周辺の畑	12月～3月上旬	1~2	x	x	x
⑤ 雪晒し	x	x	x	工場	毎日	1	工場	年中(週1回)	1
⑥ 楮皮洗い	工場	年中(週2回)	1	工場	毎日	1	工場	毎日	2~3
⑦ 楮皮の煮熟	工場	毎日	1	工場	毎日	2	工場	毎日	1
⑧ あく抜き	工場	毎日	1	工場	毎日	2~3	工場	毎日	1
⑨ ちり取り	工場	毎日	1	工場	毎日	1	工場	毎日	2
⑩ 紙たたき	工場	年中(週1.5回)	1	工場及びその周辺	年中(週4回)	1	工場	毎日	1
⑪ 繊維ほぐし	工場	毎日	1	工場	毎日	1	工場	毎日	2
⑫ 紙漉き	工場	毎日	2	工場	毎日	1	工場	毎日	1
⑬ 紙圧搾	工場	毎日	1	工場	毎日	1	工場	毎日	2
⑭ 紙乾燥	工場	年中(週2~3回)	-	工場	毎日	1	工場	毎日	1
⑮ 紙選別	工場	毎日	5	他社に委託	毎日	-	体験館	毎日	2
⑯ 工芸品製造	体験館	毎日	-	売店	毎日	-	売店	毎日	-
⑰ 販売	売店	毎日	-						

3年から「五箇山和紙まつり」が毎年開催されている。平成9年、道の駅と同じく合掌造り建築様式である和紙創作活動施設が完成し、「和紙の里」としてオープンしたことに伴い、「全国和紙ちぎり絵展」も開催された。ちぎり絵を通して五箇山和紙をより幅広く使用し、和紙産業の更なる発展を図ることが目的である。相倉世界遺産集落に位置する相倉の合掌造り古民家を活用し、体験・販売施設を新たに設置し、様々な製品を販売している。また近年では五箇山和紙製品のブランド化が進んでいる。これまでに行われた和紙産業振興活動は和紙産業の発展と発信に優れた効果をあげている。聞き取り調査の結果、五箇山和紙製品を専門とする五つのブランド（平成29年8月時点）は次々と成立し、関連情報を地域の三組合のホームページや他の新聞記事に掲載され、地域・都市内・オンラインの販売施設及び多くの展示会で流通するようになり<sup>21)</sup>、全国市場に和紙産業の再生を促す役割を積極的に担っていることが分かった。また昭和57年から後継者の育成及び村外の若者との交流事業を行うことで、若者の就業機会の拡大及び定住促進を図るため、「財団法人五箇山和紙工芸研究協会」が発足した<sup>22)</sup>。ブランドを立ち上げたのは主に若者の芸術家であり、ブランド事業促進のため、若者の移住も昔より増加する傾向になりつつある。ブランドの確立は、自然や歴史、文化などの地域資源が磨き上げられた結果によるものである。

調査では五箇山和紙産業を基礎として、地域の和紙生産組合らは大学と連携した交流活動を企画し芸術家と共に豊富な展示活動を行うなど、教育の観点からの新たな位置づけについても取り込んでいることが分かった。昭和57年の「和紙の里」の製品展示室の設置のほか、平成2年には「和紙工芸研究館」と『やま』との対話館を一棟の建物にし、新たな展示室を設け、製品を展示するとともに和紙の歴史資料をはじめ和紙の加工工程の紹介を同時に行い、五箇山和紙の普及促進が図られた。平成4年に「東中江組合」は第十六回全国伝統的工芸品展において五箇山和紙を使った提灯紙によって、「伝統的工芸品産業振興協会会長賞」と「特別賞」を受賞した<sup>22)</sup>。また三組合は大学と連携し、インターンシップの形で大学生が楮畑作業や和紙加工などの作業を体験できる機会を作り出している。学生がインターンシップで訪れる際には合掌づくりの空き家を宿泊施設として活用している。五箇山和紙産業及びそれに関わる文化的景観の保全活動は、他分野との連携及び交流を深めることで進展しつつある。

## 6. まとめと考察

五箇山地域の和紙産業に関わる文化的景観を地域レベル・集落レベル・家屋レベルから分析した結果、明治後期以降に土地利用の変化が見られた。和紙産業と原材料の栽培は地域住民の生活の一部となり、小規模ではあるが、今日においても独特な土地利用と空間構造を形成している。明治後期以降に地域全体で土地利用が変化しはじめ、楮畑は明治後期から平成初期まで減少してきた。昭和中期に和紙生産の再開や楮の栽培の奨励などの振興活動が行われたが社会的問題などが原因で楮畑は急激に減少した。過去の大半の楮畑は徐々に水田や樹林地となったが、居住域周辺には三組合が所有する一部の楮畑があり、居住域から少し離れた庄川の両岸斜面の平坦地、緩傾斜地にも畑が存在することで小面積の和紙生産に関わる土地利用が引き継がれていた。また、一部の家屋周辺には昭和期と同様に楮の栽培を続け、楮蒸し小屋と原材料を貯蔵する倉庫を設けるなど、変化をしながらも和紙生産の文化を継続する取り組みがあった。また、集落での和紙生産に関わる作業はほとんど消失したものの、「和紙の里」や合掌造り古民家などが和紙文化の拠点として機能するようになったことは、五箇山和紙の文化的景観を引き継ぐ上で意義あるものと考えられた。

五箇山和紙の生産形態については、個人から組合へと変化した

ことによって、産業の活性化が進み生産高が増える傾向が見られた。原材料である楮の栽培作業は季節性があり、明治期からの作業工程が引き継がれている。しかし、現在、和紙産業を営んでいる3組合すべてにおいて畑作業の労働力が不足していた。また村内の栽培農家が減っているため、他の地域からの原材料調達が増加していた。和紙の加工に関しては、雪晒し、板干しなどの伝統的な作業を屋外で続ける職人もおり、そうした文化的景観も重要な要素として機能していた。和紙の加工手順には変化が見られなかったが、機械導入に伴い一部の加工工程の作業方法が変化していた。伝統的な手作業はより多くの労力が必要となり、また効率を下げることから、維持していくことは困難であると考えられる。

五箇山和紙は地域の伝統生業として住民の生活を支え続け、それに関わる文化的景観の価値を再認識するため、様々な保全活動に取り組んでいた。行政施策に位置付けられた地方の伝統建築様式の体験館の建設、世界遺産集落に位置する民家での体験・販売施設の設置、和紙製品ブランド化など町の観光と結びついた事業が行われていた。また大学との交流活動を企画し、芸術家とともに展示活動を行うなど教育の観点からの新たな試みが認められた。五箇山における和紙産業は、明治後期以降、地域の中で関わる人々や関連する土地利用の面積は大きく変化したものの、地域活性化に貢献する伝統産業としての新たな役割が認められるようになった。今後は文化的景観の重要な要素として断片的に継承されている楮畑や伝統的な作業風景などの維持に関する課題は残る一方で、地域住民や観光客などは和紙産業に関わる文化的景観への認識及び意見を検討することも一つの課題となると思われる。

## 補注及び引用文献

- 文化庁(2019)：文化的景観の保護のしくみ：文化庁、2pp
- 丸谷耕太・山下三平・内山忠・小川勇樹(2014)：小石原郷の里における作圃に関わる文化的景観の変容に関する研究：都市計画学会論文集49(1)、83-92
- 経済産業省ホームページ：日用品・伝統的工芸品<<https://www.meti.go.jp/>>、2019.4.16更新、2019.8.20参照
- 黛卓郎・石垣良弘(2006)：歴史・文化・風土を活かした地域づくりとランドスケープ技術<特集>固有化と総合化(こむなで)：ランドスケープ研究70(1)、24-27
- 丸谷耕太・土肥真人・杉田早苗(2012)：大曲曲げわっぱにみる伝統工芸と文化的景観に関する研究：ランドスケープ研究75(5)、411-414
- 田中求(2017)：和紙がみよる人と森(特集 森のめぐみと生物文化多様性)：森林文化協会：22-31
- 平村史編纂委員会(1985)：越中五箇山平村史・上巻：平村
- 南砺市(2016)：南砺市五箇山景観計画：南砺市、9pp
- 田中求(2014)：和紙原料生産を巡る山村の動態—高知県の町柳野地区の事例：林業経済研究60(2)、13-24
- 長尾雅信(2017)：和紙原料の流通状況とその諸課題：新潟大学経済論集102、37-49
- 田中求(2013)：土佐和紙の里の変遷—高知県の町柳野地区の事例：第124回日本森林学会大会発表データベース、日本森林学会
- 市川智美・宮崎清(1998)：山梨県中富町における和紙産業と地域のかかわり—地域における地場産業・伝統的工芸産業の在り方に向けて：日本デザイン学会研究発表大会概要集45、272-273
- 森朋子(2013)：大字単位からみた五箇山の文化的景観の深層構造—世界遺産相倉・菅沼集落と周辺山村集落の文化的景観の保全に関する研究：都市計画論文集48(3)、579-584
- 春名美玲・黒田乃生(2010)：五箇山相倉集落における農地保全に関する研究：ランドスケープ研究73(5)、751-754
- 和田尚子・鈴木雅和・横張真(2007)：五箇山相倉集落における茅葺き屋根維持システムに関する研究：ランドスケープ研究70(5)、689-694
- 瀧澤有加・黒田乃生(2016)：五箇山の念仏道場と仏教行事の変化に関する研究：ランドスケープ研究79(5)、449-452
- 「五箇山」、歴史的には旧平村・上平村・利賀村のいわゆる「五箇三村」を指すものですが、江戸時代から紙漉きの村は庄川沿いに平村・上平村を中心として発達したが、利賀川沿いの利賀村は和紙産業がなかった。
- 富山県和紙協同組合(1996)：越中和紙—歴史、技術、技法、伝統的工芸品指定及び素材表示加工品の見本紙：富山県和紙協同組合、3-4
- 全国手すき和紙連合会(1996)：和紙の手帖II：全国手すき和紙連合会、100-105
- 平村史編纂委員会(1985)：越中五箇山平村史・下巻：平村
- 五箇山和紙製品に関連するブランドについて以下の例をあげる：①「FIVE」②「ちんちろ」③「SEKKA」(「五箇山和紙の里」が製作)、④「GOKKA」(「農事組 財団法人五箇山和紙」が製作)、⑤「悠久紙」(「東中江和紙加工生産組合」が製作)。
- 南砺市平行政センター(2007)：越中五箇山平村史・続編：南砺市

(2019.9.28受付, 2020.3.30受理)